

ブルードンの系列理論と経済科学

齊 藤 悦 則

1843年の『人類における秩序の創造』*De la création de l'ordre dans l'Humanité*⁽¹⁾においてブルードンが企図したのは、科学方法論としての「系列理論」の提示と、その理論にもとづく経済社会の体系的な分析であった。そこで本稿で私が考察してみようとするのは、「系列理論」にもとづいて構成されたブルードンのこの段階における経済科学についてである。1840年の『所有とは何か』にはじまる一連の所有批判を経て、ようやく体系的なまとまりをもつに至ったここでの彼の経済科学は、1846年の『経済的諸矛盾の体系』へとつながっていく。

1843年段階におけるブルードンの経済科学の基底をなす彼の「系列理論」とはどのようなものであったか——その概観からこの考察をはじめることにした⁽²⁾。

(1) 使用したのは、Rivière 版全集。

(2) より詳しくは、拙稿「ブルードンの系列理論について」『一橋研究』第2巻第1号を参照のこと。

I. 基礎理論としての「系列理論」

ブルードンの提示する「系列理論」は、複雑で錯綜した現実を整序化し了解可能なものとしてとらえかえすものなのである。つまり、現実というものは諸々の要素が複雑に絡みあい、しかもそのようなものとして一個の全体性として現われているものであるから、われわれはそれを分割し、それに内在する法則にのっとりそれを再構成しなければならない、というのである。

このように、ブルードンの「系列」とは、全ての事象が分割可能なものであり、そして分割された個々の要素の間には一定の関係が存在する、ということ

をいうものなのである。彼によれば、系列は次の3つの要素から成っている。まず、眼前の対象をどのように分割するかという視点 *point de vue* である。分割された個々の部分は単位 *unité* と呼ばれる。そして、単位の間を関係を目指すところの根拠 *raison* である。こうして、系列化 *sériation* というのは、端的に言えば、分割と構成（再結合）の作業のことであることがわかる。

更に、彼の「系列理論」において一層重要なことからは、系列の進化ということである。彼の考えによれば、はじめに単純な、あるいは基本的な系列を設定すれば（それは方法的には下向の過程のはてにあらわれてくるものなのだが）、今度はそうした単純な系列を新たな単位として一層高次の系列が構成される。更にまた、この段階までは単一であった視点を複合化し、こうした複数の視点にもとづいて整序化された諸系列は一つの体系を構成するに到る。系列がこのような進化の道をたどることによって、新たに獲得された体系的系列（複合的系列）は、初源的な単純な系列がもっていた確かさ *certitude*（数学などの自然科学がそのモデルをわれわれに提供する）を喪失することなく保持することになる、と彼は考えた。このように、最も単純なものから出発して、厳密な確実性の経路を通じて、最も複雑、不明瞭な世界（彼にとっては経済社会学の対象としての現実世界）をとらえかえそうというのが彼の企図したものであった。

II. 経済科学の対象：労働

ブルードンは、経済的諸事象を分析するにあたって、まずその観察すべき対象を科学的に決定する必要がある、と考えた。すなわち、経済学とは生産および富の分配についての科学である、というだけでは不十分なのであって、それが扱う対象は系列の法則に従って分割され構成されるべきものでなければならず、また分割された諸部分（すなわち単位）は同一性 *identité* をもつものでなければならない。しかるに、富の源泉を土地・農業・工業・商業・貨幣などのあれこれに求め、またさまざまな形態であらわれる生産を単一で普遍的な原理で分析することなく、その多様性の内に埋没してしまっていることが多くの

経済学上の混乱を生みだしているのだ、と彼は考えたのである。この点について、A. スミスが富の源泉を労働であると把え、生産の諸形態を考察するにあたって労働を単一で普遍的な軸としたのは卓見であった、という。

このように、ブルードンはスミスの学説に多くを学びながら、あらゆる経済的事象の背後に人間の労働を発見し、労働という点での同一性をもって経済事象を分析することが系列理論の経済学への適用なのだとし、このことが経済学を正確な科学とする唯一の保証なのだと述べるに到る。

「労働に関することのみが経済学の素材である」(Création, n° 369)。

「系列というものは分割を前提とする。経済的諸系列を構成するためには…労働を分析する必要がある」(n° 370)。

この科学の対象を労働であるとした瞬間から、ブルードンの経済学は、実現された労働としての生産物ばかりでなく、その労働の担い手の組織の問題、生産物の分配や労働の管理を含む法 *droit* をも扱うものとなり、総合的なふくらみ——ブルードンの意図するところでは、社会の総体を眺望するもの——をもつものとなる。

それではブルードンは労働というものをどのように定義しているのであろうか。彼によれば、労働とは「個人的満足を目的とした、素材 *matière* に対する人間の知的な働きかけ」(n° 371) である。すなわち、道具を媒介とした人間の能動的な力と、それ自体は力をもたない受動的な素材との結合、こうした人間と自然の共同 *communion* として、彼は労働をとらえたのである。

このことから、労働を把えるにあたって次のような視点が設定されることになる。すなわち、まず素材を視点とした労働の分析、ついで人間(生産者)を視点とした労働の分析である。前者は生産と富の流通についての科学を形成し、後者は組織 *organisation* の科学をつくりあげる。そして、上の2つの科学の派生物(あるいは総合)として、法の科学がでてくるが、これは労働者の抽象的表現である機能 *fonction* の配分・管理と賃金の分配を対象としたものである。

彼自身の言葉でこれを見てみると、

「経済学は、富の生産と分配をその対象とする。一言で言えば、それは労働の科学である。

客体的視点からみた労働、すなわち、その実現とその成果において考察された労働は、経済学の第一部門をなし、そして今日までのところ、そののみが扱われ、ねりあげられ、成功してきたものである。

主体の側から、その分割と系列において考察されてきた労働が、経済学の第2部門をなす。それは組織に関するものであるが、前者よりはるかに検討されることの少なかったものである。

「最後に経済学の第3部門であるが、それは法の科学に関するものである。それは前の2部門の結合であり、価値と組織の理論による与件に従って、正と不正とを分けるものである」(n° 382)。

経済学の対象(素材)は労働である、と言いきることによって、ブルードンの経済学は百科全書的ともいうべき構想の下に展開されることになる。対象を複合的な視点でとらえ、それぞれの視点によって分割と構成を行う中でそれぞれの系列を発見し、それらの系列を再び構成することによって現実社会についての一大タブローを描きだそうというのが彼の意図だったのである。

III. 客体において考察された労働

素材に対する人間の働きかけとしての労働は、まず第一に生産物としてあらわれる。そしてブルードンは、生産物=価値=資本=賃金という「系列の方程式」(n° 415)をうちたてるが、それらはそれぞれ実現された労働の独自の局面であって、しかも生産物から賃金へと順次高次化していく系列なのであることを示そうと考えたのであった。

「実現された労働は、生産物と呼ばれる。有用な生産物は、価値と呼ばれる。蓄積された価値は、再び生産に用いられることによって、資本となる。

「(生産物と価値という)2つの局面において眺めるとき、それは特殊な考察の余地をわれわれに与えるものであるが、同様に、われわれが資本という名のもとに労働をみれば、それが一つの新しい経済的事実の系列を生みだし、よ

り高次の公式をみちびきだすものであることをみるであろう」(n° 395)。

以下、生産物からはじまる個々の局面についての彼の考察をみてみることにしよう。

a) 生産物

ブルードンの「系列理論」とは、個々の事象と同時にそれらの構成された全体をも視野の内にいれようとするものであるから、生産物を見る場合においても、個々の生産者の問題と社会的な生産の問題とがともに考察される。

ここでは純生産物と粗生産物という区分が問題とされる。(「控除 *déduction* 以前の労働者〔生産者〕のとり分は粗生産物、控除以後のものは純生産物と呼ばれる。産業はすべからく前払いとあれこれの道具の消費を必要とするから、道具としての素材と生産物としての素材との区別からくる互いに相関的な純生産物と粗生産物の区別が一般化されたのである」(n° 386)。だが、これは個々の生産者についてみた場合の区別であって、生産者全体、あるいは社会全体についてみれば、この区分は無意味なものである、という。「事實は円環運動をなすのであって、純生産物と粗生産物という表現は、ただ人間と人間との共同作業の関係を示すだけであって、この関係は、社会においてみれば必然的に無効 *nul* である」(n° 387)。

このことが言及しているのは、純生産物という名の下での地代の合法化に対する批判であり、少しく結論を先どりして言うなら、あらゆる事象は系列として存在しており、それは根本において均衡が成立していることを示唆するものであって、従って現実世界においてみられる一切の矛盾は、こうした「自然状態」における均衡が人為的に破壊されていることから生じたものなのである、というブルードンの一貫した主張を背後にもつものである。

集合力 *force collective* としてあらわれる生産者(労働者)群を単に個々の生産者の総和ととらえることは系列の法則に対する無知であり、しかもその混同は賃金の支払い(生産物の分配)における「計算まちがい」を生むものであって、系列の認識は現実におけるこのような異常 *anomalie* を修正し、本来的

な均衡を実現するものである、と彼は考えたのである。

b) 価値

「達成された生産物、その創造をひきおこした欲求を満足すべきものとして生産物は、価値と呼ばれる。従って、価値の基礎には生産物の効用 *utilité* がある」(n° 390)。

これが労働、およびその成果を個別性においてとらえた定義づけであるとするならば、当然その次には労働を社会的にとらえた場合の考案が続かねばならない。労働を社会的・総体的にみるならば、それはまず分割されたもの(分業)としてあらわれ、そしてそれらは生産者の連帯という形で再結合されるものなのである。つまり交換という行為がその具体化なのである。

「生産物の効用が交換の必要条件であり、交換が労働者の生活の必要条件であるから、社会は種々の産業の間での活発で誠実なコミュニケーションがなければ、つまり一言でいうなら、交易の集中がなければ持続しえないものなのである」(ibid.)。

こうして、彼の考えによれば、価値が生産物の効用を表現するときには使用価値、交換において生産物が相互に評価しあうときには交換価値という名称を得るのである。価値の2重性すなわち使用価値と交換価値は、生産物に対する買い手(消費者)の側と売り手(生産者)の側との間の見方の差を表現するものであって、本来的には同一のものである。「科学[系列理論]に従えば使用価値と交換価値は、規則的な社会においては全く同一のものである」(n° 392)。つまり、労働が正しく分割され、労働者はその生産物の販路をもち、生産者と消費者は連帯している、というのが系列の法則にのっとったノーマルな社会の姿なのである。使用価値と交換価値の対立は、従って現実社会における組織(有機性)の欠如を反映したものだ、と彼は言う。「労働の生産について、それが交換されるのはその効用にもとづくものであるから、その売価が生産物の効用を上回ったり下回ったりするとみるのは矛盾なのである」(idid.)。

「経済秩序において、アブノーマルなことがらは少しずつ修正されていき、

持続的な一連の修正によって、人類における絶対的諸法則の発見を導きだす」(n° 393)。

「遂に全ての運が計算に従い、きまぐれの神は束縛され、誠意が勝利して、経済学が次のようなマフォリズムを宣する日が近づいている。すなわち、

生産物の割当て *quotité* をきめるのは買い手であり、ものの価値を労働の量によって定めるのはつくり手である」(n° 394)。

c) 資 本

実現された労働は生産物と呼ばれ、ついで価値という名称をうけとる。蓄積された価値は資本となる。従って、資本も労働の一つの変態にすぎない。ところが現実には資本と労働とが対立しあい、非和解的なものとして現象している。こうした現実における混乱は系列の法則の誤解、ないし無知にもとづくものだ、とブルードンは考えた。

「実は同一のものであるこの2つのものを区別したところに全ての悪の根源があり、そして科学の今日の停滞の原因がある」(n° 396)。

この批判は、まずサン・シモン派に向けられる。彼らは、資本・労働・才能を生産の本質的原理として対等に位置づけているが、これは偽の系列なのである。つまり、「与えられた3つの項が、一つの単純な系列をなすためには、…それらを集合させている視点の下においては、それらが独立し、対等のものとして区別されていなければならない。しかるに、あれほど賞讃されたサン・シモン派のこの系列にあっては、第1の項は一つの^{変態} modalité であり、第3の項は第2の項の一つの^{性質}なのである」(n° 397)。

系列理論がわれわれに教えるのは、現象における対立・矛盾の本来的同一性である。従って、ことがらの合理性を批判したり、否定するだけでは不十分なのであって、現象の背後にある均衡(系列法則)を描きだすことが必要なのだ、とブルードンは考えた。資本について言うなら、それが本来どのようなものであり、どのような役割を本来はたすべきものなのかということが考察されねばならない。それは、資本というものがどのようにして形成されたかということ

の考察から与えられる。

歴史のはじまりにおいて、人間は無知であり、労働の分割（分業）もなかった。しかし、自然における素材の豊富さに対する人間（自己）の単一性 *unité de moi* (n° 378) と、生産の迅速化の必要と生産物の質の向上のために、分業が発生した。労働の分割（分業）は労働の結合（集合力）と同義であるから、分業が同時的な作業のみならず、同一の対象に対して共通の目的をもってなされる継続的な作業全体を表わすものであると同様に、集合力は現に用役を提供している労働者の労働のみならずその労働が一定のインターヴァルを経て実現されるような労働者の労働を含んでいる。そして、資本とはこのような労働を表わしている (n° 403)。資本とはこのように労働の分割に伴って一つの歴史的必然としてあらわれたものであり、それは労働と本来の同一のものなのである。従って、資本家は自分自身で資本をつくりだした限りにおいては生産物の分配にあずかる。これこそが系列の法則なのであって、労働者でないものが資本家として認められることに今日の異常性 *anomalie* が存在するのである。

所有についても同様のことがいえる。つまり、人類はその始原において無知・無経験から出発したのであり、労働の分割もただちには秩序だった組織化をつくりださなかったが、この無秩序の段階を経て、人間は自分が自然（素材）とかわりあう部分を自らのものとして意識するに至る。こうして所有がこの段階における秩序をつくりだしたのである。「所有は、産業の分割の、そして産業の進歩の源となる必要条件だったのである」(n° 402)。所有は資本の形成の必要条件であり、信用・流通・銀行を生みだし、商業の組織化、普遍的連帯を生むべきものである。このように、所有も歴史的必然としてあらわれ、しかも人類における秩序の創造を準備する「諸要素の一つであり、なによりも貴重なものである」(ibid.)。そして、所有者が労働による素材との結びつきから離れたときに、現実における社会的混乱がはじまったのだ、とブルードンは考えた。

以上の考察から、彼は次のような結論づけをしている。「万人が単一の作品 *oeuvre*, すなわち社会的富にかかわり、万人がその貯えによって資本家と呼ば

れ、従って万人が互いに債務者であり債権者である。こうしたことが労働者を結合するときがたい鎖なのである。……このことが取得の共同性 *communauté* と個人性 *individualité* とを同時に表現する普遍的連帯というものである」(n° 403)。

d) 貨 幣

実現された労働は、生産物・価値・資本という名称をつぎつぎに得てきたが、発展した社会において労働はその報酬を生産物という形ではなく賃金という形態で受けとる。そこで賃金の検討が必要となるのだが、その前に賃金が貨幣の存在を前提とするものであることから、ブルードンはその限りで貨幣を考察している。

彼のみるところ、貨幣は産業の発展に伴う流通のための道具の必要から、一種の慣習として生じたものであり、それは「最も稀少で最も変形しにくい素材に適用された労働の産物そのもの」(n° 406) であり、「価値の標準 *étalon*」(n° 407) として機能するものである。

彼の考察はこれだけにとどまり、彼自身1849年版につけた自註の中で次のように述べている。「この貨幣貨幣の問題については、著者〔ブルードン自身〕は、ここではその後の『諸矛盾の体系』や『信用と流通の組織』〔ともに1848年に出版〕においてよりもはるかに低い段階にいることを言っておかねばならない」(p. 321)。

e) 賃 金

労働・生産物・価値と同様に相関的なものである賃金は、富の生産・流通・消費の接点をなすものである。

交換のない社会、すなわち個々の生産者が自分のためにだけ働いている社会において、賃金は生産物に等しい。ところが、労働が分割されている社会では、賃金は一つの比例関係をあらわすものである。従って問題は、諸々の価値を比較する尺度、すなわち個々の生産者において買いたいものと売りたいもの

との間の価値尺度を見出すことにある。これに対し、スミスにならって、生産に必要な労働が価値の尺度であると答えてもよいが、それでは分割され専門化され多様なものとしてあらわれる労働というものが、そもそも一つの正確な尺度に従うのかという問題が生じてくることになる、とブルードンは言う (n° 409)。

ここで「系列理論」の用語で言うなら、「労働とは、事物における人為的系列の自然的系列への重ねあわせ *superposition*, あるいは代置 *substitution* であり、全てこうした……系列というものは互に通約できないものであるから (通約可能なものなら労働の分割・専門化は生じなかったであろう)、従って、生産物において考察された労働は、比較の尺度をもたないのである」 (n 410)。すなわち、それぞれ個別の形態であらわれる生産物の系列は相互に比較しえない、と言うのである。

ところが、労働というものは、別の視点に立てば、分割されうるものである。つまり、「種と類とに、一言で言えば、系列と考えられうるものであるから、必然的に労働は測定されうるものである」。以上のことから、「労働の尺度は、客体の内には見出せなかったのであるから、主体の内、すなわち労働者のうちに見出されねばならないものなのである」 (*ibid.*) とブルードンは考えた。つまり、「労働を測るということは、相互に通約不能の価値を比較することではなく、諸々の〔労働者の〕能力 *capacité* の関係を見出すことである」 (*ibid.*) としている。

労働の尺度を時間にする考えに対して、ブルードンは、「産業のちがいを捨象したものである時間は、一つの勝手な *arbitraire* 尺度、プロクルテスの寝台……にすぎない」 (n° 411) とこたえている。

こうして、賃金の問題はここでは解決されず、次の考察へ手渡されることになる。「賃金の問題は、組織の法則が認識されるまで未解決のままである」 (*ibid.*)。

IV. 主体において考察された労働

これまで労働の成果、すなわち客体化された労働の諸形態についてみてきた

が、今度は労働する主体、すなわち労働者そのものを分析しなければならない、とブルードンは考えた。社会において労働はどのように組織されており、また、それはどのようなものでなければならないか、というのがここでの彼のテーマである。

さて、労働を組織するということは、労働者の自然的系列を発見することである、と彼は考えた。「しかるに、系列は全て必然的に一つの関係によって集合せられた諸単位より構成されているものであるから、社会的系列を構築するためには、 1^0 単位の決定、 2^1 根拠の発見が必要である。社会的系列、われわれはそれを一つの有機的な系列としてあるべきものとするのであるが、そこにおいて有機的な単位となるのは労働者、もう少し抽象的に言うなら機能 *fonction* である」(n^o 413)。

こうしてブルードンは労働を分業において考察し、そこで労働者の基本的性格となるものと、その機能を有益でノーマルなものとして実現させるための諸条件を見出すとする。そして次に、この基本的な単位の系列的な総合がどのような社会の組織化につながるものであるかを見ようとしたのである。

a) 特殊化 *Spécification*

労働を分割するとはどういうことなのか。ブルードンの挙げた例でこれを見よう。

土を掘って、その土で築山をつくる作業を 100 人（もちろんこれは30人でも1000人でも同じことなのだが）の労働者が行う場合、2通りのやり方がある。一つは、各人が土を掘っては土を盛る作業を行う場合である。このとき集合力の利点は見失われている。他の一つは掘る人、運ぶ人、盛る人と分けられた場合である。これは前者と比べると $\frac{1}{2}$ ないし $\frac{1}{3}$ の道具が過剰となり、スピードも3～4倍はやくなる。このとき労働は真に分割されたというべきである。

このことから明らかなように、労働の分割とは、第1に資本の儉約である。第2に、それは単なる分割・細分ではなく、類のうちに種をみるような特殊化 *spécification*、分化 *différenciation* なのであり、「現象としてあらわれる、

あるいは神学的な言い方をするなら、社会の内に肉化された系列そのものなのである」(n° 417)。

労働の分割が資本の儉約であることから、それが大規模経営に適合するものであり、すなわち小規模経営では十全に機能しえないものであるとブルードンは考えた。そして、これを農業においてみるならば、小所有を基盤とした大耕作 *grande culture*こそ系列の原理に適うものだと考えたのである。

さて、労働の分割が、盛土作業の第1の場合にみたような単なる作業の分割ではなく、類のうちに種をみるような分化であることから、労働の分割とは労働の専門化でなければならないと、彼は言う。労働の専門性 *spécialité*こそ、労働者の能力を十全に発達させるものなのである。従って、「労働者の専門化、アトリエや生産用具の専門性、こうしたものが労働の第1条件であり、その機能の基本的性格なのである」(n° 418)。

だがここで問題なのは、労働の分割・専門化をどの程度にまで行うべきなのか、つまり、無限に細分化し、その最後の要素にまで、分割するべきなのか、ということである。この問題は、単位の構成という視点において考察されねばならない。

b) 構成

系列というものが、分割と構成という2つの条件においてのみ成立するものであることを忘れて、分割の法則にのみ従い、素材を無限に細分化するとしたら、それは理解不能なさまつきの内に埋没してしまうだろうし、その最後の要素にまで還元された労働は、それを行う労働者にとっては耐えがたいほどバカげたものとなるであろうとブルードンは言う。労働は、分割され、そうして再び集合させられ、構成され、系列化されてはじめて、純粹で規則的な形態をとるのである。

つまり、規則的に分割された労働というのは、その分割された一つ一つが、単一のものとして独立していながら、多様なものであり、一つの総合として存在していなければならない、と言うのである。そして系列は、それを構成する

単位それ自体が一つの系列、すなわち分割されれば再び新しい系列をなすような一定の単位からなるものなのである。

従って、前の項でみたような「労働の専門化」とは総合的な作業がそもそも保持している単一性、多様性、調和といった諸々の性格を喪失することなく保持しつづける労働の分化なのであり、それは同時に一つの総合・構成・系列なのである。

ところが現実においては、労働は専門化されるのではなく、細分化されたものとしてあらわれている。労働の細分化（誤まった専門化）がもたらすものの第1は、労働者の知的・道徳的な退廃であり、監督や技術者の価値を不当に高く評価することであり、そして第2の成果は監督がみていないところでは労働者は仕事を怠けはじめることからくる生産物の不完全さである。生産の極めて小さな一部分への労働者の固定であるこの細分化は、社会の系列化（秩序の創造）に背反するものなのである。

それでは十全な労働者 *travailleur complet* (n° 429) としてブルードンは何を考えてか。まず、農業労働においてこれを見てもみると、労働者は四季おりおりにさまざまな作業をするのであるが、その作業の一つ一つは農業労働の一部分であり、従って労働者の労働を完全なものとするには一年全体が必要なのである、という。このことから、彼のいう十全な労働者というのは、いずれの業種においても、それを構成する全ての部分労働に通じ、実践能力を身につけた労働者のことなのである。ピンの製造を例にとれば、それは18の工程より成っているのだが、労働者はそれらの作業を次々に移動し、全ての工程を学び、実践することによって、ピン製造の専門家として産業社会の一構成員となるのだ、というのである。そして、こうした方法による労働者の結合は、専制的でも不公平なものでもなく、同胞愛にもとづく相互的な、それでいて厳格な監視を生み出す。「そこにおいて、自由・平等・連帯、そして正義が実現されるであろう」(n° 430)。

こうして労働は専門化（分化）によって、他と自らとを区別し、独立しようとし、自らの自由と個性とを手に入れようとするし、構成によって、労働は知

性の全ての要求，総合と連帯への志向にこたえようとするのである。

さて，労働者の抽象的表現である機能というものが系列の法則の一つの適用であるということから，われわれは新しい考察に入りこむ。すなわち，社会的諸機能は，単位としての同一性の原理から，相互に平等なものでなければならないということである。

ブルードンの考えによれば，現実社会における混乱にとらわれて諸機能を比較しようという不条理に陥っている人々は次のことを見落している。すなわち，天才の発見といわれるものは，系列の知覚・認識にすぎないものであること；人間の生産物は全て，系列法則の本能的な，あるいは理性的な適用であり，系列の法則は現象のあらゆる局面において貫徹していること；労働者の能力の差はこの法則と彼の理性との間の一致の多少のみに原因があることである（n° 437）。

従って，人間の能力の比較の尺度は系列の法則そのものなのだ，と彼は言う。機能がノーマルなあり方をしているための必要条件は，社会的労働のそれぞれが単一性・多様性・調和という性格をもつことによって，機能が他の機能と区別せられること，機能は他の機能とそれぞれ類の内の種と同じ形で結合しており，そのことによって一個の全体をなすものであること，なのである。そして，十全な労働者は系列というものを純粹かつ理想的な形で把握しているものである。だから，「自らの労働の内に創造的な作業というイメージをもつことを学ばず，また自分の生産物に一つのマイクロコスモスをみることを学んでいない労働者は全て，眠りこんだ知性であり，不具の器管なのである」（n° 438）。

そこで系列の法則に従って組織化された社会においては，人間の能力はほとんど平等のものとなるであろう，とブルードンは言う。「系列の法則は，諸能力の共通の尺度であり，社会的諸機能は相互に等価のものであるから，それらの生産物は相互に評価しあいうるものであり，賃金は平等なものである。物価表をつくるためには，それぞれの生産物の実現に必要な平均時間を示せば十分である」（n° 442）。こうした考察は，前節のところで残されていた賃金の問題を解決するためのものであった。そしてここでブルードンが最も言いたかつ

たのは、賃金の平等を実現する社会は、現実の背後にある自然的系列の本質を歪めずに高次化したものであるから、観念的空想の産物ではなく、現実社会の混乱の中から一つの必然事としてあらわれてくるものなのだ、ということである。

V. 体系としての社会

主体における労働の考察から労働者の機能は相互に等価であること、また客体における考察から労働の成果は労働と結びついてのみ取得されることが明らかとなった。そして、賃金がこれらの結節点をなすものであった。「賃金は生産物に等しいものでなければならない」(n° 444) というのが、経済科学の第の部門の考察の出発点となる。これは正と不正とを区別する命題であり、さまざまな法の体系を分析する視点となるものである。こうして労働の総合的考察は、法の科学となる、とブルードンは考えた。

賃金の考察からわれわれは労働者の責任という観念を得る、という。労働者は自らの働き『oeuvre』に対して責任をもつという形で法の世界にかかわるのであり、従って、労働者の責任というものがこの部門における単位をなすのである。そして労働者の責任は、労働・交易治安の一つの必要条件なのだ、という (n° 445)。また、行為に責任をもつということは、行為者の側に自由と眼識 discernement が存在していることを必要とするのであるから、ここでいう労働者の責任というものも、系列の法則の認識、すなわち自らの作業についての十分な知識、自分のもち場がなぜあそこでなくここなのかということについての認識を必要としている。

そして正義は、個々の労働者の責任の一つの総合である。「正義というのは、全ての労働者がその生産物を通して一つの平等な満足『bien-être』を得られるようにすることにある」(n° 444)。そこで、正義をとりあつかうこの部門は、生産物の分配、労働用具の配分、また租税、相互保証、社会の管理を対象とするものなのである。

ここにおいて個的所有とは素材に対する労働者の責任管理を意味するものと

なる (n° 547)。「占有権がはっきりと確立され、相続・贈与・遺言・利子付貸借・担保の真の精神が理解されるのもそこ [法の科学] においてである。今日においては極めて無秩序で有害なものであるこれらの習慣が、どのようにして規律化され、秩序と平等の確立に貢献しうるものとなるか、ということもそのときわかるであろう」(n° 448)。

そして生産と交換とが、社会的な規模で、系列の法則にのっとった規則的な展開をするその只中において、どうして私的で自由な労働の世界が存在するのか；また、巨大の体系の中にあつて、個々の労働者がどうして個性と自発性を失うことなく生き生きと活動できるのか、ということのをわれわれに理解させるのも、経済科学のこの部門なのである、とブルードン述べている (ibid.)。

以上、ブルードンは3つの視点にもとづいて労働を考察してきたが、これらは全て現象の背後にある系列の法則を浮彫りにする作業なのであった。そこで次にそれらの現実化のあり方を考察しようと考えた。それは労働を歴史的に考察することである。「人類における秩序は一気に創造されるものではない。それは少しずつ *pièce à pièce* 構築されていくのである」(n° 498)。進化の系列としてあらわれるブルードンの歴史発展図式は次のようなものである。まず、産業のない、従つて非分割の、従つて系列のない部族制 *Tribu* がある。ここでは各人が各人のために生産している。「この未組織の段階のあと、まず集合力と連帯が共産制においてあらわされる。ついで、労働の原初的な単位とその分割の法則が君主制において生みだされ、そして民主制において自由が付加されてそれが構築される。それから集中 *centralisation* が封建制においてあらわれる。そして最後に、これらの要素は平等制 *Egalité* において調和的に基礎づけられる」(n° 515)。

ブルードンの見るところ、これは系列理論(科学)の獲得の過程である。つまり、認識の深化の過程であり、「教育」の過程なのである。この「教育」、あるいは歴史を、彼は労働をとらえる4番目の視点とした。

このように労働は4つの視点において考察されるが、「この労働というもの

は、社会の形をつくる力であり、その成長の諸々の局面と、従ってその内的・外的なオルガニスム全体を決定づける理念型 *idée-type* である」(n^o 546)。従って社会というものは次のようにとらえられる。すなわち、「社会は4つの面からなる一つの構成された、すなわち体系的な系列なのであり、生体と同様有機的な系列なのである」(ibid.)。こうした、ブルードンの経済科学は体系的系列としての社会を、分割と構成のうちに、すなわち系列理論によって、総体として眺望しようとするものであったということができよう。

(筆者の住所：東京都国立市谷保5200)